

## 第二章 馬原鉄男の部落問題研究の歩み

今西 一

はじめに

一九七〇年代から九〇年代にかけて、部落史または賤民史の研究は、質量ともに大きく前進してきている。ところがその一方で、部落史が賤民史や都市下層社会論に変わり、身分制研究に研究の比重を移すなかで、部落史が本来もっていた部落の解放、差別の解消という問題意識が稀薄となり、静態的な身分制研究や支配論に傾斜してきている。

この事態のひとつの背景には、戦後の「高度経済成長」期に生まれた研究者が多数を占めるようになり、部落差別の悲惨さを知らない世代が増えてきたことによる。しかし、人間は他の動物と違って、想像力や構想力という能力をもっているのであり、資料や報告書を読むなかで、部落差別の実態の幾何かを追体験できるはずである。従って問題を、単純な「世代」論に解消したくない。

本章では、戦後最も多くの部落に入り、体当たりで部落差別を書き続け、部落問題の研究をリードしてきた一人である、馬原鉄男の生涯と研究内容の一端を紹介することによって、今日の研究動向を反省していききたいと考えて

いる。また、馬原の本格的な伝記の一素材にでもなれば幸いである。

## 一 馬原鉄男の生い立ち

### (1) 少年時代と戦争

馬原鉄男<sup>まはら</sup>は、一九三〇年二月一五日、宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井で、父馬原常雄、母アキノの三男として生まれている。兄が二人、弟が二人、妹が一人の六人兄弟である。馬原家は、祖父の時代に分家し、六〇七反（内一反を自作）を耕作する貧しい小作農民であり、父の荷馬車引きなどによって、辛うじて生計をたてていた。後年、氏は「小学校四、五年のころ、収穫時庭先に積み上げられた米俵の半分近くが地主の所に運ばれるのを見て非常にかなしかった」と語っている<sup>1)</sup>。

高千穂町三田井は、「九州山地中央部、五ヶ瀬川上流、高千穂盆地の中心部に位置する。山間に立地する西臼杵郡で最も平坦」な地である。一八九一年の「戸数四三〇・人口二、八一八（男一、四六四・女一、三五四）、厩一九一、寺院一、学校三、水車場六（徴発物件一覧表）。高千穂町役場所在地。明治六年大区長役場が置かれて以来郡役所の所在地として発展し、中心部は市街地となった。県北の交通の要路で、専売所・税務署・区裁判所・保健所・県支庁・警察署など西臼杵郡行政の役所や銀行が置かれ」た所である<sup>2)</sup>。

高千穂でも開けた地域であるが、かつて馬原は――

私の出身地の宮崎県を例にとって考えてみますと、たとえば東北の場合ですと、農家の次男・三男はふつうオンチ坊といわれています。深沢七郎の小説に「東北の神武たち」というのがありました。あれとまったく

同じような状態で農家の次男・三男が、長男のために餓い殺しにされているわけです。一生嫁をもつこともできなければ、もちろん分家をすることも許されないといった状態で、次男・三男が長男の犠牲にされていたのが、かつての宮崎県の農村ではなかったかと思えます。さらにつけ加えますと、そこでは女性に対する差別がきわめてきびしく残されています。

いまでも山間部の農村に行きますと、たとえば女の人の干物はぜったいに家の正面とか日なたには干さないという習慣が残っております。必ずかけ干しといまして、家のうらななどのように全然人の眼につかないところにしか干物はかけないというわけです。あるいはまた同じ場所に洗濯物をほす場合には必ず男の干物が女の干物より上にある。女の干物は、いつでも物干竿の一番下におかれます。もちろんたらいも男と女では厳重に区別されるということも、決して珍しくはなかったということです。

と、自分の村の「封建性」について語っている<sup>③</sup>。

馬原少年は、一九三九年、高千穂尋常小学校に入学するが、一九四一年の国民学校令によって、同校は途中で高千穂国民学校に変わった。小学校時代は、家にも学校にも本がなく、家に帰れば長男は手術の失敗で足が悪く、次男は朝鮮へ働きに行っていたので、牛馬の世話や野良仕事におわれ、まったく勉強する時間がとれなかった。ところが小学校六年の時に、担任の戸高久先生は、馬原少年が中学校に進学したい希望をもっていることを知って、無料で行ける熊本の航空機乗員養成所を受けることを勧めてくれた。戸高先生が自宅に泊めてくれたので、一カ月位、中学校を受験する生徒に混じって猛勉強をしたが、残念ながら受験には失敗してしまった。

中学校には学費の關係で進学できず、高等科二年になると、友人たちは、民間企業への就職、少年航空兵・少年戦車隊・水兵へと進路を決めていった。しかし、進学への夢を捨てられなかった馬原少年は、無料で行ける宮崎師範学校を受けて合格した。後に師範学校に行ったのは、「半分は師範学校を出ると軍隊で幹部候補生になれる」と

いう特典があったからだと同想している。無料とはいえ生活費はいるので、師範学校に行けたのは、父親が荷馬車を引き「歩いて歩いて」日銭を稼いでくれたからである。

一九四五年の四月に宮崎師範に入学するが、戦争も最末期であり、合格通知とともに持って行ったのが、三角巾（縷帶）や血液型を書いた紙であった。翌五月一日に大空襲があり、寮に残っていた同郷の友人が爆撃で死亡し、その無惨な遺体と一夜を明かしたことがある。この空襲で師範の学生だけでも三、四人は死んだであろう。

学校に入っても勉強は出来ず、寮が焼けたので宮崎市から二〇キロメートル離れた公会堂を借りて合宿生活をし、昼は農作業をして幾らかの食料を貰って自炊生活を続けた。配給は高粱コウリヤンと麦しかなく、付近の農家から貰った薩摩芋の蔓や野菜を混ぜた雑炊を作るのが大仕事で、唯一の楽しみは近くの農家の農作業を手伝って貰う握り飯であった。食べ盛りの頃に、栄養失調と皮膚病に悩まされた青春時代であった。そうしているうちに八月一二日の空襲で学校が全焼になり、翌日、米一升と飯盒を貰って帰郷を命ぜられた。四五里歩いて家に帰る途中、高鍋で敗戦の知らせを聞いた。「暑さと空腹で疲れ切っているせいか、一瞬思考が止まった感じで、ショックよりむしろホッとしました」と、後年語っている。周囲には、軍事物資を積んだトラックが忙しそうに走っていた。

馬原は家で農業をしていたが、翌四六年に学校が再会され、学校に戻った。校舎がないので川南の航空隊の跡の兵舎が使われた。若い教師は東京に戻り、軍国主義者は追放されていたので、教師も定員の半分しかいなかった。しかし、追放された漢文の先生の代わりにやってきた英語の先生から、「民主主義、デモクラシー」という言葉聞いたのは、新鮮であったと語っている。四八年の本科一年の時に宮崎の校舎が再建され、やっと学校らしくなってくる。兵舎跡には図書館もなく、満足に本も読めなかった。

## (2) 学生時代と歴史学への旅立ち

本科一年の終了の時に新制の宮崎大学学芸学部が変わり、馬原は進学適性検査という初めてのアチーブメント・テストを受けている。新制大学では、過渡的処置として二年コースと四年コースを設定するが、二年コースを選択している。ここで無料だった学校が有料となり、アルバイトらしいアルバイトもなかったので、学費を稼ぐために闇の焼酎の「運び屋」をやっている。

宮崎市の郊外に大島という地域がある。ここは「世帯数は八五〇、うち奄美大島（徳之島をはじめその他の西南諸島も含めて）出身者が半数を占める四五〇、沖縄出身者が二五〇、残りの一五〇が宮崎市周辺の引揚者、戦災者という」寄合世帯である。同地域は、「『大島』と名のつて就職した人はごくまれだ。仕方なしに、関西に出稼ぎに出かけるわけであるが、それも、大部分が造船所の臨時工という恵れない職場で我慢しなければならない。結婚にしても例外ではない」という奄美・沖縄差別を受けている地域である。この地域では最盛期の一九五一年に、「実に部落の九割迄が何らかの形で焼酎密造に関係して生活をたてていた」のである。この「頃になると、製造技術もへたな専門の酒造家をしのぐほど熟練し、県内はもとより、隣の繩のれんにまで『大島焼酎』の名声<sup>⑤</sup>を放っていた。馬原は、大島地域の友人の世話で闇焼酎を買い、五〇度から六〇度の原酒を水枕に入れて、北九州の進駐軍の黒人専用バーに売りに行っていた。勿論、警察に見つかれば没収か逮捕であった。被差別地域や黒人差別を見た、最初の体験であった。朝鮮戦争下での北九州の黒人暴動も目撃している。

学生運動との係わりでは、一九四九年に自治会の役員になり、同じ下宿にいた宮崎県学連の委員長古葉雄俊らの影響を受け、朝鮮戦争反対運動に参加する。古葉らは、「日本における軍事基地の実態」という地図のついたビラを学内に貼り、農学部活動家たち三人はマッカーサーの勅令違反で逮捕されて退学になった。馬原も学芸学部

ピラを貼ったが、同じ下宿の友人が剥がしてくれたので、逮捕・退学をまぬがれた。これがアルバイトにおわれるなかで、唯一体験した学生運動であった。この頃、農学部にいた上野裕久先生（憲法学）が学生たちをかばってくれたのを印象深く覚えていた。

その頃から読書をするようになり、『きけわだつみのこえ』から始めて、社会科学の本を片っ端から読み出した。河上肇の『貧乏物語』、スターリンの『レーニン主義の基礎』などを読んだが、小泉信三の『共産主義批判の常識』を読んで、逆に共産主義の正しさを確信したという。スポーツでは師範の本科一年から人学一年の頃、当時としては珍しいラグビーをやっていた。

一九五一年の三月に卒業するが学生運動のために就職はなく、学部の全員が決まった最後に、やっと僻地の中学校の教師となった。郷里高千穂の隣の三ヶ所村であるが、同村は「九州山地の一部をなす山間部に位置し、東は二上山・赤土岸山、西に鏡山・祇園山、南に揺山・大仁田山など一、〇〇〇m級の山々に囲まれ」た村である。馬原が赴任する前々年の四九年に「三校の分校を廃して三ヶ所中学校に統合した。校舎は赤谷に建設し、遠距離の生徒のために全国でも数少ない寄宿舎制度を設け」ていた。一九五〇年の同村の「総生産額一億六、四八三万円余、うち農産四、八四一万円余・畜産八一九万円余・林産三、二三〇万円余・水産一八万円余・工業三、四六九万円余・鉱産四、一〇四万円余」である。鉱業の比率が高いが、これは同村に三ヶ所鉱山があるからである。新日窒鉱業系統の銅山で、五一年には「従業員二二〇人、年産一万六、〇〇〇tになった。埋蔵量もかなりあり、品位も割合高いが、いわゆる瓢箪鉱脈で、経費がかかり、輸送の便が悪いので」、同年をピークに生産量が落ち込み、五三年には閉山に追い込まれた。

「総農家戸数七七二戸、うち専業農家五九六戸・兼業農家一七五戸、農用地総面積一、〇〇三町二反」である。<sup>7</sup>農家一戸の平均農用地が一町三反歩余というのは全国平均並みであるが、水田はわずかに「二六九町八反」しかな

く、他は殆ど生産力の低い畑地である。家庭訪問をしても、家のなかに蒲団さえなく、藁のなかに足を入れて寝ている子さえいた。馬原は、自分も貧乏な暮らしをしていたが、そこまでも貧乏な暮らしはしていなかったという。

表 中学生歴史文庫（一九五一〜二年）

日本史	世界史
貝塚と古墳 大仏開眼 源氏と平家 豊臣秀吉 大名・町人・百姓 日本の科学者 明治維新 日本の資本主義 日本の民主主義 平和を求めた人々 近代日本の文学 太平洋戦争	人間の先祖 文明のあけぼの ルネッサンスと宗教改革 産業革命 フランス大革命 平和の歴史 戦争の歴史 労働運動の歴史 アメリカの歴史 東洋の文化 近代の中国 新しいアジア
杉原 莊介 北山 茂夫 西岡虎之助 林屋辰三郎 前田 一良 高橋 磯一 服部 之総 田中惣五郎 奈良本辰也 遠山 茂樹 猪野 謙二 松島 栄一	井尻 正二 尾鍋 輝彦 松田 智雄 三枝 博音 鈴木 正四 荒井 信一 江口 朴郎 前芝 確三 清水 博 飯塚 浩二 北山 康夫 岡倉古志郎

また、村の図書館が出来、そこで井上清の『くにのあゆみ批判』（一九五三年）、岩崎書店の中学生歴史教室を読んで、「初めて歴史の真実を学んだという気がした」という。学生時代から勉強していいのを痛感し、クラスの生徒が殆ど中学校を出れば零細な家内工業に働きに行くのに、そういう子供たちに「将来をどう生きるのか」と確信をもって教えられないという思いが強くなって、学校を辞めて京都の立命館大学へ再入学することを決心した。当時、「県内でもトップクラスの二大メーカーの焼酎工場」が三ヶ所村赤谷にあり、毎日、焼酎ばかり飲んで暮らしていたという。

立命館大学を志望したのは、福村書店の中学生歴史文庫のなかでも、北山茂夫の『大仏開眼』や前田一良の『大名・町人・百姓』などの名著があり、北山・前田を始め林屋辰三郎・奈良本辰也・前芝確三など、立命館の先生が最も多く同シリーズの書き手であったからである（表参照）。この三ヶ所中学校を辞める時に、生徒が見送りにきて、生徒の前で必ず帰ってくることを約束したが、今でも忘れられない、という。

一九五三年の一二月に、京都の叔父を頼って上洛し、五四年の四月に立命館大学の三回生に学士編入したが、同級生には考古学の田辺昭三らがいる。ここでもアルバイトの連続で、家庭教師や映画のエキストラで生活費を稼いでいた。当時の大学は、「立命館史学の黄金時代」で、古代史は北山茂夫、中世史は林屋辰三郎、近世史は前田一良・奈良本辰也、近代史は岩井忠熊、美術史は中井宗太郎の各先生方がおられた。どの授業も愉しかったが、ちょうど林屋先生は、『歌舞伎以前』（一九五四年）のなかで、戦後歴史学の出発にあたって、戦前には軽視されていた地方史、部落史、女性史という三つの新しい分野の歴史学を提唱され、中央の貴族や武士の歴史に対して地方の民衆、部落民、女性といった抑圧された人々の歴史研究と復権を提言されていた時である。この三つの歴史の提唱は、林屋らの天皇制批判でもあった。林屋・奈良本両先生の影響を受けながら、部落史への関心を深めていった。

学生運動としては、三回生の時に「立命館大学文学部日本史クラス」で、「中学校の歴史教科書批判」を行なっ



ている。これは馬原が中心になってやったもので、日本史研究会の大会や歴教協全国大会などで報告している。歴史は「生産者の歴史であり、常に生産者である人民の歴史であらねばならぬ」という立場から歴史教科書批判であり、その後の馬原の歴史観の原点になっている。四回生になると自治会の副委員長に選ばれ、委員長は鴨沂おひ高校の先生になる片岡秀計である。

卒業論文は、奈良本先生の指導で、筑前の玄洋社の研究を始めた。後に「自由民権運動に於ける玄洋社の歴史的評価」という題で、『日本史研究』第二八号に掲載された論文である。当時の問題意識としては、自由民権運動に関心があったのではなく、貧困を科学的に解明したいということと、封建的な地域の問題、軍国主義の悲惨さということを痛感して、何故貧しい人ほど保守的であり、軍国主義や国家主義を支えるのかという問題を考えたからだという。卒論の後、前田先生から大学に助手として残らないかというすすめがあった断って、一九五八年、奈良本先生のすすめる部落問題研究所に入った。

## 二 部落問題研究の歩み

### (1) 部落の現実 に接して

最初、奈良本先生の話して、部落問題研究所の給料は、一万三〇〇〇円ということであったが、これは研究所からは七〇〇〇円だけが支給され、後の六〇〇〇円は大学院の奨学金で貰えということであった。研究所の給料は出たり出なかったりで、しかも奨学金は後でしっかり返還させられている。

当時の部落問題研究所は、東山区七条内浜の京都靴商工組合の二階にあった。奈良本先生が所長で、所員には木

村京太郎・三木一平・東上高志という錚々たるメンバーと、事務員の渡部幸子がいた。三階には部落解放同盟京都府連があり（後に解放同盟が二階になり、研究所が三階になる）、木村・三木は解放同盟と兼任で、『解放新聞』の編集を担当していた中西義雄が研究所の非常勤研究員になったりしていた。研究所は、ひどいポロピルのなかにあり、いつも便所の臭気はするし、雨が降ったら雨漏りがするという状態であった。しかも財政状態は最悪で、東上は「私が研究所に入った時点でも、使用済み原稿用紙も全部裏を使っていたし、発送する封筒にも向こうから来たものをひっくり返して使った。そして中央郵便局まで近所の商店で借りたりヤカーに雑誌『部落』をつんで運んで行く、というやり方で、やっと維持されていた」という。給料も遅配は当たり前前で、出たり出なかったりの状態であった。

馬原は、大学院に籍を置きながらの研究所生活のスタートを、三木一平の回想のなかで次のように語っている。

私が三木さんとはじめて言葉を交わしたのは、一九五六年三月初旬、京都から姫路方面行きの国電のなかであつた。朝早く出かけたのだろうか、電車のなかはかなり混んでいて、ドア近くにもたれながら、「ところで、君の名前はなにやったかいナ」と三木さんから聞かれたときは、正直ガツカリした。その前日、はじめて部落問題研究所を訪れ、新任の挨拶をしたつもりであつたが、実は名前も覚えられていなかったわけである。

正式には、四月からの採用であるが、その前の小手調べとして私にあたえられた仕事は、ちょうどそのころ、兵庫県小野市でたたかわれていた差別行政反対闘争を取材し、雑誌『部落』三月号にルポを書くことであつた。……（略）……九州の田舎から京都にできてまだ二年余り、部落問題については、立命館大学在学中に『部落の歴史と解放運動』『生きている封建制』（部落問題研究所、一九五四年刊）などを読んでそれなりに理解していたつもりであつたが、未解放部落の実態と部落解放闘争の現実にふれるのは、これが最初である。……（略）……

小野市の闘争は、町村合併に伴う小・中学校の統廃合で、部落を不当に差別あつかいしたことから端を発したものであるが、その過程で、これまでの行政による差別待遇の実態がつきつきとバクロされ、いわゆる差別行政闘争として発展してきたものである。……(略)……

翌朝、三木さんに連れられて部落のなかを一巡した。家の貧弱さについては、農村の貧農の生活を体験している私にはさほどの驚きではなかったが、農村にありながらそれが都市以上に密集しているところに、農村一般の貧農の生活と異なる部落の現実をみた。そのあと、三木さんと連れだって部落のすぐそばを流れる加古川の堤防に立ったとき、余りに歴然とした差別の状況に、いい知れぬ憤りを押さえることができなかった。加古川が大きく蛇行して、水流が勢よく岸を洗うその突端に部落が位置しているわけだが、かんじんの堤防がその部分だけ途切れているのである。三木さんは、加古川筋にある部落の大半がそうだと説明してくれた。部落が水害の常襲地帯となるのは当然のことであった。私は「差別行政」を、実感をこめて体得することができた。

この結果書き上げたのが、無署名の「差別行政に立ちあがる部落」(『部落』七四号)というルポルタージュであり、馬原の部落ルポの最初である。この時期から六〇年代にかけて、馬原は部落を見てまわり、「三木さんに連れられて歩いた部落の一つ一つが『学校』の役割を果たしてきた」と語っている。<sup>⑩</sup>

当時の部落の様子は、馬原の雑誌『部落』に掲載されているルポ、調査報告書、『解放への闘いと教育』(一九六三年)、『進路保障』(同年)などの著書を見ていただきたい。ここでは、名著『日本資本主義と部落問題』(一九七一年)から、一九六〇年代前後の部落の様子を抜き出してみよう。

京都市のなかでもっとも人口密度の高い中京区では、一ヘクタールあたりの人口密度は二一・三人だが、市内八部落平均のそれは三四二人となっていて、実に一五倍にも及んでいる。……(略)……

一九六〇(昭和三五)年、大阪八尾市西郡部落で、五一人の集団赤痢患者が発生した。……(略)……西郡

部落における赤痢菌の感染経路は、三四ヶ所にも及ぶ共同井戸であった。水質検査の結果、そのうち二六ヶ所の井戸水には、アンモニア・亜硝酸が多量にふくまれていること、細菌検査でも、三四ヶ所全部が、厚生省飲料水検査基準からみて、飲用不適であることがわかった。七五ヶ所もある共同便所が、いずれも不完全で、老朽化し、そのうえ、一便所あたり二一人以上使用する便所が五一ヶ所、なかには一つの便所で八〇人以上使用しているところもあって、不衛生をきわめていた、というところに、赤痢患者を大量に発生させた背景があった。部落の悪い環境が、まさしく、伝染病の温床を形づくっていたというべきであろう。……(略)……

部落の死亡率は、全国平均をはるかに上まわって、おどろくべき高さを示している。たとえば、大正年間の人口一、〇〇〇人にたいする西郡部落の死亡率は、最低三七、最高九八だが、全国平均は最低二〇、最高二七となっている。したがって、平均寿命も、明治年間平均二〇・六才、大正年間一八・六才、昭和戦前平均三三・七才、一九六一(昭和三六)年を現在とする昭和戦後平均三三・五才となっている。日本人の平均寿命が、年とともに飛躍的にのびることは、毎年聞かされることだが、部落では、まだ日本人の戦前の水準にすら遠くおよばないのである。

生命までも差別される部落差別の悲惨さを、抑えた筆で書いている。

## (2) 「日本資本主義と部落問題」論

馬原の研究にとっても大きな転換になるのは、一九五九年一月一九日、三井鉱山が六〇〇〇人の首切を発表して、三池鉱山を中心にして展開されるストライキの取材であった。馬原は、一週間以上、三池に泊込んで部落や闘争の様子を書き続けている。

筑豊には三百近くの未解放部落があるが、その殆どは、山手とか谷あいとかあるいは川筋のきわめて不便な

ところに存在している。……(略)……

鞍手郡下隈部落では炊事中の妊婦が、突然家もろ共地底に吸い込まれてしまった。死体は今日に至るも発掘されていない。

田川郡上金田部落(二四〇戸)は、かつては県道より二米も高かったが、今日では逆に一米低くなっていて、排水は一応溜池に集めてポンプで揚棄している。一度び雨でも降れば、忽ち部落中水浸しになり、軒先に大便が浮いて来る始末。二十八年以来、毎年のように赤痢、腸チブス患者が絶えないのもそのためである。

と、部落の状況を伝えている。<sup>13</sup> 馬原が最も憤りをおぼえたことは、第二組合の「第一組合は特殊部落」という差別発言とともに、「第一組合員と語っていても解放同盟にたいする現地や周囲の期待は、暴力団にたいする労働者階級の『前衛』というそれにあるように思われる」ことだと率直に語っている。「部落『暴力団』」という発想が、第一組合員のなかにも抜けないのである。そこには勿論、「従来、労働者のスト破りに部落の人たちがしばしば利用されてきた否定しがたい事実がある」<sup>13</sup>。

三池闘争を経験するなかで、馬原の関心は益々「日本資本主義と部落問題」という方向に進んでいった。三池闘争の直後に書かれた、「筑豊炭鉱における労働力の形成と部落」という論文では、「部落の大部分が、まぎれもなく近世中期以降の商品生産の展開過程のなかで成立し、それが、いわば資本主義的関係の前駆的形態として把握されるならば、部落問題は、日本資本主義の構造、すなわち、資本の支配と収奪機構のなかで適確に位置づけられなければならない。炭坑業に労働力の形成過程のなかで、賤民の動向を追求したのも、そのための一つの試みであった」<sup>14</sup>と語っている。

馬原の部落は日本資本主義が拡大・再生産しているという問題意識は、当時の部落史研究の三つの潮流への批判を含んでいた。ひとつは、滝川政次郎の「異民族起源論」、山本政男の「宗教的タブー論」、渡辺実の「古代起源論」

などの「反動的部落」論との対決である。またいまひとつは、「資本の法則が貫徹して前近代的な残滓を払拭すればあたかも部落差別が解消するかのような幻想をふりまいて」いた『同和对策審議会答申』（一九六〇年）への批判である<sup>⑮</sup>。そして最後に、これは明記していないが、恩師奈良本辰也の『部落』第二三三号（一九六一年）に発表された、「部落解放の展望」という論文への批判を含んでいた。奈良本論文は、「部落差別＝独占体制」論を批判して、日本資本主義の構造的な転換によって、「資本の側に意識して部落差別を再生産してゆかなければならない必然性は今やない」とまで断言したものである<sup>⑯</sup>。これには、中西義雄・井上清・藤谷俊雄らの批判があったが、馬原もまた、部落差別は「資本主義の生産関係そのものから、必然的にうみだされる抑圧であり差別で」あることを立証することによって、奈良本を批判している。

この「日本資本主義と部落問題」という視角は、とりわけ次の二つの注目すべき提言を生んでいる。ひとつは、「解放令」の評価の問題であり、「解放令のもっていたブルジョア民主主義的意義を再検討してみる必要がある」<sup>⑰</sup>。「解放令はいわゆる『自由な労働力』をつくりだした」という藤谷俊雄の議論を継承・発展させている。馬原は、「解放令が、部落民を封建的身分制のきずなから法制的に解放し、自由な労働力として資本前にえじきとして投げだしたということの意味するものであり、部落における労働力移動の客観的条件をととのえたものと評価できる」とし、「明治二、三〇年代」は、「部落の労働力が社会的に進出して、資本主義生産の中心部門に入りこむ客観的條件はかなり強かった、といっているでしょう。炭坑や紡績産業はその例になるかと思えます」とする。しかし、「皮革・製靴独占資本が成立」してくると、「部分的にしる資本主義生産の基幹部門に雇用されていた部落労働者は、徐々に排除され」、「資本主義生産の底辺労働を形成する」としている<sup>⑱</sup>。

また馬原は、部落産業を固定的に捉えるのではなく、「皮革とか草履とかのように封建社会からずっと部落にうけつがれておる伝統的な部落産業と、明治以後あらたに、そういった伝統的な部落産業から派生してきた部落産業

と、さらにそういった仕事とは全然関係なしに、部落の低賃金を目当てにして新しく流入してきて部落に定着した「部落産業」の三つに区分する。資本主義によって変貌している側面を問題にしている。その視点は、部落とスラムとの関係を考える時にも貫かれている。馬原は――

産業資本主義の段階ではスラムは、景気の変動につれて大きくもなり、あるいは小さくもなったものです。不景気ときには非常に増大しますが、景気がでてくるとだんだんスラムからでていって仕事につくひとが多くなる。そういう意味では景気の変動につれてぼうちようしたり、あるいは縮小したりしたのがかつてのスラムだったと思います。しかし独占資本主義の段階では、スラムの性格も、構造も質的に変わってまいります。スラムを構成する人の大半がすでに五年なり十年なり、ときには二十年も居住歴をもっておる。スラムの構成者はだんだん沈殿していつて、ほぼ固定化してくるというわけです。そうしますと、だんだん部落に近い性格をもってくる。ですから部落があるかぎり、そういった貧困者の群はますます部落の周囲にあつまって新しい部落が形成されていく。部落はますます発展していかざるを得ません。

として、「スラムの部落化」、「部落のスラム化」という現象が、近代日本のなかで都市部落を拡大してきた要因であることを指摘している。<sup>20</sup>

この問題は、「日本資本主義と部落問題」のなかで一層深められ、「封建時代の賤民集落ないし賤民集団」を核とするスラムとして、①えた身分の集落（神戸番町）、②ひにん身分の集落（東京の四谷鮫河橋・下谷万年町・芝新網、名古屋の王子町、大阪の名護町など）、③下層社会集団を、特定の地域に隔離し集中して形成されたもの（神戸新川・横浜清水谷戸）とに区分される。これは、隅谷三喜男らの労働経済論への批判を含んでおり、「原蕃期から産業革命期にかけての賃労働の役割からみると、むしろ没落士族層より旧賤民層の方が大きかった」と断言する。<sup>21</sup> 隅谷らの農村・都市「雑業」層という規定を批判して、賤民系譜を引く賃労働分析の重要性を提言している。<sup>22</sup>

また、「マッチ工業」を見る場合にも、『マッチの巻』（一九〇三年）を引用して――

黄燐は之を扱ってゐる際に始終蒸気――燐酸を蒸発するので工人之を呼吸すれば、骨大症にかかつて一命にさわることもある。（中略）この製造所の一町四方は異臭鼻をついてとても耐ったものではありません。（中略）この職工が銭湯に往けば湯の温度で蒸されると見えて満身から大蒸たいぎんに似た燐の臭を発してその傍の銭湯客は皆耐えられなくなって逃出すでせう。銭湯では皆黄燐の職工の入浴はお断わりすることが常ですね。と、マッチ工業が「低賃金に加えて、労働が危険で、附近に『異臭』をまきちらし」、職工たちが差別されている原因を見逃さない。

### (3) 水平運動史の研究へ

この筑豊闘争をルポし、「日本資本主義と部落問題」という終生のテーマと取り組んでいた頃の馬原は、赤貧洗うがごとき生活のなかにあった。一九六一年春、馬原は三ヶ所中学校時代の同僚であった松岡郁と結婚する。郁は、一九三二年二月一九日、馬原と同郷の西臼杵郡鞍岡村で、三等郵便局長の父松岡勝と母たまつの長女として生まれた。延岡高等女学校を出て、新制宮崎大学を二年で卒業し、初めて勤めた三ヶ所中学校で馬原と出会ったのである。一九六〇年に郁は京都に出てくるが、当時の馬原は部落問題研究所の給料で生活しており、それも出たり出なかりで、郁の非常勤の講師料が生活の主な糧であった。郁は、長女穂波を妊娠しながら、他人の産休代用教員で半年間、三つの小学校を転々とした。馬原は、学生・大学院時代に買った本を、古書店にせつせと運び、書架はからっぽになったという。その後、二女真澄、三女早苗の三人の子供に恵まれた。

馬原の生活を見るに見かねた先輩で美術史家の赤井達郎が、一九六三年、大阪工業大学工業専門学校の専任講師の口を探してきてくれた。給料は八〇〇〇円から三万円に跳ねあがり、毎月確実に貰えるようになって、初めてテ



レビヤ冷蔵庫を買った。六三年から暫くは、大阪工専の教育に専念していたが、立命館大学の理工学部と同和教育の授業も担当していた。当時の学生たちにとって、部落問題への関心は高かった。

一九五〇年代後半から六〇年代前半にかけては、部落問題が社会問題として浮上し、「国民的課題」として提起されるようになる。キリスト者を始め、広汎な人びとが部落解放運動に参加するようになった。ところが一九六六年一月、解同京都府連の三木一平・塚本景之の除名問題から発展して、部落問題研究所のあった文化厚生会館を「解同」朝田派が占拠するという事態が起った。戦後最初の本格的な部落解放運動の分裂であった。当時、馬原は大阪工専の仕事に従事していたが、「事件は衝撃的であり、部落解放運動だけは分裂することはないと考えていた」と語っている。

この時期から、馬原はもう一度、積極的に部落史の研究に戻ってくる。一九七〇年の広島市で開かれた第八回部落問題研究者全国集会で、水平運動史の共同研究を提唱する。

現在部落解放運動は、水平社創立五十年の歴史のなかで、ひじょうな困難なる事態に直面しています。運動の理念をめぐる対立、組織上の不団結は、単に部落解放運動自体に深刻な打撃をもたらしているばかりではなく、わが国の民主主義運動にもきわめて不幸な影響をあたえています。

私たちは、部落解放運動五十年の歴史から、いまこそ真に部落問題を完全に解決する解放理念と、その実践的すじ道を学びとり、科学的な解放理論を創造的に発展させなければなりません。その意味で、水平社創立五十周年の記念すべき年を二年後にひかえた今日、水平運動の歴史を全面的に明らかにすることは、きわめて実践的な意義をもつものと思います。

『水平運動の研究』の執筆者を求めて、全国を駆けめぐっている馬原の様子は、次の新藤東洋男の回想からわかる。

私と研究所とのかかわりは、大牟田市役所前の「うどん屋」で馬原鉄男さんとの会談であった。文部省科学研究助成金をえて「水平運動の総合研究」の共同研究への参加の要請のために大牟田まで馬原さんが私を訪ねて来て下さったのであった。私は「九州における水平運動の研究」を担当していた。この水平運動の研究の成果は、部落問題研究所から一九七一年から刊行をはじめ、七三年一月にかけて全六巻を刊行された。この時期には、研究所の野村宣行さんに大変お世話になったことも記録しておかなければならない。……(略)……野村さんの恩師・前田一良先生のお宅に伺ったことも思い出される。

水平運動史の研究では、馬原の陰で立命館大学大学院の後輩野村宣行が、いつもサポーターとしての役割を果たしていた。しかし、この野村も八鹿高校事件の心労などで、一九七六年、三三歳の若さで不帰の人となる。野村の死を、家族とともに最も惜しみ、悲しんだ一人は馬原である。

馬原は、この共同研究を踏まえて、一九七二年に『水平運動の歴史』を刊行する。同書を含めた馬原の水平運動史には、「水平運動における社会主義の影響力、労働運動との階級的連帯」「三角同盟」論への高い評価、そして全水青年同盟―全水無産者同盟―解消派<sup>22</sup>への高い位置付けに対して、全水社会民主主義勢力の評価の必要や、「全水創立における民族自決論の影響や、初期水平運動における宗教的(とりわけ浄土真宗)影響等」の欠落などが指摘されている。<sup>23</sup>

馬原自身も、「第一に、全体の叙述が、それぞれの時期のたたかひの頂点、解放理論の頂点をつないだものとなっていて、部落解放運動の積極的な側面がやや一面的に強調されるといふ傾向をもっているように思う」。「第二、第一の問題とも関連するわけであるが、先進的な理論やたたかひを連ねていく反面として、権力の融和政策と小ブルジョア中間層の改善、改良主義との区別を無視してすべてこれを敵視したり、圧倒的多数を占める無党派的な部落大衆の日常的生活要求や運動を軽視するといふ傾向があったように思う」。そして第三に「日本資本主義の発展

とともに、部落と部落民の階級・階層関係がどのように変化し、部落解放の主体的条件がどのように成熟したのか、もし成熟しなかったとすればなにがそれを阻んできたのか、ということ明らかにすることが望まれている」と語っている<sup>80</sup>。

またこの時期、馬原は脇田修らと協力して部落問題研究所の歴史部会を再建し、一九七二年の『部落問題研究』第三三輯の特集「歴史における身分制の再検討」に見られるような、吉田晶・黒田俊雄・脇田修・藤谷俊雄らの高い水準の議論を、部会のなかで展開していった。

しかし、現実の要請からも、一九七〇年代の後半からの馬原の研究課題は、戦後史・現状の解放運動が中心になってくる。紙数の制約からも筆者の能力の限界からも、ここで一先ず筆を擱きたい。なお馬原は、一九八〇年から立命館大学経済学部で職場を移している。

おわりに

今日の「差別」論なき「部落史」研究に対しては、一九六〇・七〇年代の馬原の部落史研究から学んでもらいたいと考えて小論をしたためた。最近流行の「都市下層論」も、馬原らの研究を十分に踏まえて進められているとは思えない。

しかし今日から見て、馬原の研究に問題がないわけではない。六〇年代の馬原の研究は、現状においても差別の拡大・強化論であり、その淵源を歴史的に探るといふ方法であった。この議論は、「国民的融合」論の台頭以降、馬原の部落史のなかで何が残り何が変わったのか、まだ充分総括されているとはいえない。

馬原自身は、かつての自分の部落解放論のなかには、部落の窮乏化が進めば、一般の労働者・農民との統一戦線

が拡大するという「窮乏革命」論的な弱点があった、と語っている。そのことが、部落のプロレタリア化を過大に評価し、水平運動における「左派」の過大評価にもなったという。部落の中間層や上層の改良主義的な運動を充分に捉えられなかった、ともいう。馬原らしい謙虚な反省であるが、馬原が提起した「賤民系譜を引く賃労働者」や「差別的労働市場」の問題は、今日的な観点から、再度発展させていかなければならない課題である。

#### 註

- (1) 木全久子「かお 馬原鉄男氏」〔部落〕第三九九号、一九八〇年)七〇頁。以下、本章は一九九一年二月二五日、馬原研究室で行なった聞き取りをもとにしている。
- (2) 竹内理三編『角川日本史地名大辞典 宮崎県』(角川書店、一九八六年)七〇七・七〇九頁。
- (3) 馬原鉄男「部落はどうなっているか」(部落問題研究所『部落問題入門』部落問題研究所、一九六二年)六六頁。
- (4) 木全前掲記事、七〇頁。
- (5) 同右。
- (6) 馬原鉄男「沖縄、奄美の友よどこへ行く」〔部落〕第九八号、一九五八年)六九・七一・七五頁。
- (7) 前掲『角川日本史地名大辞典 宮崎県』三七八・三四〇〜三四一頁。
- (8) 立命館大学文学部日本史クラス「中学校の歴史教科書批判」(『日本史研究』第二四号、一九五六年)九六〜九七頁。
- (9) 藤谷俊雄他「部落問題研究所の四十年」(部落問題研究所、一九八八年)一〇頁。
- (10) 馬原鉄男「部落問題研究と三木さん」(故三木一平氏合同葬実行委員会『不屈』部落問題研究所、一九八一年)二二〜二二頁。
- (11) 馬原鉄男『日本資本主義と部落問題』(部落問題研究所、一九七二年)三二〇〜三二五頁。
- (12) 馬原鉄男『黒い羽根』そのかげにひそむもの」〔部落〕第二二三号、一九六〇年)六八〜六九頁。
- (13) 馬原鉄男「三池争議と部落問題」〔部落〕第二二五号、一九六〇年)一三・一七頁。
- (14) 馬原鉄男「筑豊炭鉱における労働力の形成と部落」(『新しい歴史学のために』第九八号、一九六四年)六頁。

第二章 馬原鉄男の部落問題研究の歩み

- (15) 馬原鉄男「部落問題」(馬原鉄男他「現代日本の社会問題 三」汐文社、一九七〇年)一〇五頁。
- (16) 奈良本辰也「部落解放の展望」一九六一年(部落問題研究所編「部落問題セミナー」部落問題研究所、一九七〇年)一六頁。
- (17) 馬原前掲「部落問題」九頁。
- (18) 藤谷俊雄「日本資本主義と部落問題」一九六五年(同「部落問題の歴史的研究」部落問題研究所一九七〇年)二〇六―二〇七頁。
- (19) 馬原鉄男「未解放部落における労働力の流動形態」(「部落」第一九〇号、一九六五年)六五―六七頁。
- (20) 馬原前掲「部落はどうなっているか」七三・八九頁。
- (21) 馬原前掲「日本資本主義と部落問題」四五―五〇頁。
- (22) その後の馬原の研究としては、同「日本都市下層社会研究覚書」(「部落問題研究」第七四輯、一九八二年)、同「日本資本主義と部落問題」論(部落問題研究所編「部落史の研究 近代篇」部落問題研究所、一九八四年)参照。
- (23) 馬原前掲「日本資本主義と部落問題」五三頁。
- (24) 馬原鉄男「水平運動史研究の成果と課題」(「部落問題研究」第二九輯、一九七一年)四八頁。
- (25) 新藤東洋男「研究所とのかかわり」(「会報」第七五号、一九八九年)二頁。
- (26) 野村宣行「部落問題の研究と運動」(野村千代子発行、一九七七年)参照。
- (27) 藤野豊「水平運動の社会思想史的研究」(雄山閣、一九八九年)一七頁。
- (28) 岩村登志夫「反戦反ファシズム闘争と水平社」(「部落問題研究」第三九輯、一九七三年)。
- (29) 藤野前掲「水平運動の社会思想史的研究」一七頁。
- (30) 馬原鉄男「戦後部落解放運動史研究の問題点」(「部落問題研究」第四七輯、一九七六年)八―九頁。

馬原鉄男著作仮目録

A 著書・共著

- 1 部落産業の史的分析(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九五七年七月

- 2 都市部落(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九五九年七月
- 3 同和地区実態調査 北桑田郡美山町和泉地区における酪農の現状とその意識調査(京都府教育庁社会教育課) 一九六〇年三月
- 4 部落の人間像(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九六〇年一〇月
- 5 やさしい部落の歴史(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九六一年八月
- 6 同和地区実態調査 綾部市の水害をめぐる部落の歴史的背景とその現状(京都府教育庁社会教育課) 一九六二年三月
- 7 部落問題入門(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九六二年一〇月
- 8 同和地区実態調査 福知山市における未解放部落の水害の歴史と生活実態(京都府教育庁社会教育課) 一九六三年三月
- 9 解放への闘いと教育 汐文社 一九六三年五月
- 10 進路保障 部落問題研究所 一九六三年一月
- 11 農村部落(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九六四年二月
- 12 同和地区実態調査 由良川筋における未解放部落の実態(京都府教育庁社会教育課) 一九六五年三月
- 13 部落問題セミナーⅣ 部落問題の歴史 解説(部落問題研究所編) 汐文社 一九六五年一〇月
- 14 未解放部落における労働力の流動形態(その1) (大阪府同和事業促進協議会) 一九六六年三月
- 15 現代日本の社会問題1(真田是他共編) 汐文社 一九六六年六月
- 16 未解放部落における労働力の流動形態(その2) (大阪府同和事業促進協議会) 一九六七年三月
- 17 明治百年問題(青木書店編) 青木書店 一九六八年五月
- 18 「明治百年」と部落問題(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九六八年二月
- 19 日本の貧困地帯上(堀江正規編) 新日本出版社 一九六九年一月
- 20 現代日本の社会問題3(真田是他共編) 汐文社 一九七〇年二月
- 21 奈良県同和事業史(奈良県同和事業史編纂委員会) 奈良県 一九七〇年五月
- 22 現代日本の社会問題4(真田是他共編) 汐文社 一九七〇年八月
- 23 日本資本主義と部落問題 部落問題研究所 一九七一年六月

- B
- 【部落問題研究】
- 24 水平運動史の研究 2・3・4 (資料編上・中・下) 解説(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九七二年一月
  - 25 水平運動の歴史 部落問題研究所 一九七二年八月
  - 26 水平運動史の研究 6 (部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九七三年六月
  - 27 テキスト 部落問題の歴史 部落問題研究所 一九七五年三月
  - 28 現代日本の部落問題 部落問題研究所 一九七六年一月
  - 29 部落問題の学習 1 (部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九七七年五月
  - 30 物語・戦後部落解放運動史(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九七七年八月
  - 31 新しい部落解放の理論 兵庫部落問題研究所 一九七八年六月
  - 32 戦後部落解放運動史の研究(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九七九年一月
  - 33 北原泰作部落問題著作集 1・2・3 解説(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九八一年一月〜一九八四年五月
  - 34 写真集 水平運動の人々(山田梅雄写真) 部落問題研究所 一九八二年三月
  - 35 中西義雄部落問題著作集 1・2・3 解説(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九八四年五月〜十二月
  - 36 部落史の研究 近代篇(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九八四年九月
  - 37 部落の歴史と解放運動 近現代篇(部落問題研究所編) 部落問題研究所 一九八六年九月
  - 38 転換期の部落解放運動 部落問題研究所 一九八八年九月
  - 1 資料紹介・福岡における明治中期の部落解放論 一九六〇年六月 五号
  - 2 ルポ・部落産業① どたん場にきた伊勢表―三重県松阪市東町をたずねて― 一九六〇年六月 五号
  - 3 ルポ・部落産業② 食肉の“まち” 一九六〇年一月 六号
  - 4 ルポ・部落産業③ ニューフェイス登場・模造真珠 一九六一年一月 七号
  - 5 水害と部落―福知山市堀部落調査の中間報告― 一九六三年六月 一三号
  - 6 部落調査の現状と課題 一九六三年九月 一四号

- 7 資料・社会運動の状況「水平運動」I(昭和四年) 一九六八年三月 二二号
- 8 「近代化」政策と部落の現状 一九六八年一〇月 二三号
- 9 支配政策と部落問題 一九七〇年三月 二六号
- 10 部落産業の階級的性格 一九七〇年七月 二七号
- 11 水平運動史研究の成果と課題 一九七一年二月 二九号
- 12 近代部落史研究の動向 一九七一年三月 三〇号
- 13 一九七二年の部落問題研究 一九七三年七月 三八号
- 14 部落解放運動と融和政策(上) 一九七三年二月 四〇号
- 15 統一戦線と部落問題―部落の変化を科学的に明らかにしよう― 一九七四年三月 四一号
- 16 部落解放運動と融和政策(下) 一九七四年一〇月 四三三号
- 17 「被差別統一戦線」論批判 一九七五年六月 四五五号
- 18 部落問題をめぐる情勢と研究の当面する課題 一九七五年一〇月 四六号
- 19 戦後部落解放運動史研究の問題点 一九七六年三月 四七号
- 20 戦後部落解放運動史研究の成果と課題 一九七六年六月 四八号
- 21 戦後部落解放運動論(上) 一九七六年八月 四九号
- 22 戦後部落解放運動論(下) 一九七六年一〇月 五一号
- 23 水平運動における糺弾と融合の理論 一九七七年七月 五三三号
- 24 戦後部落解放論の再検討 一九七七年九月 五四号
- 25 国民融合をめぐる理論的諸問題 一九七九年六月 六〇号
- 26 民主主義の課題と今日の部落問題 一九八〇年一〇月 六五号
- 27 部落問題研究への証言?・水平運動の軌跡・アナからボルへ―山本利平氏に聞く― 一九八二年二月 七三三号
- 28 日本都市下層社会研究覚書 一九八二年二月 七四号
- 29 日本の民主主義と部落問題研究の課題―理論問題をめぐって― 一九八三年五月 七六号
- 30 部落解放理論の再検討 一九八四年七月 七九号



- C 「部落」(署名論文に限定)
- 1 部落史研究の成果と課題 一九五七年一月 八四号
  - 2 この現実をどうするか―九州の部落問題 鈔書― 一九五七年一〇月 九三号
  - 3 ルポ・沖繩奄美諸島の友よどこへ行く―宮崎市大島部落をたずねて― 一九五八年三月 九八号
  - 4 座談会・学芸大学における同和教育 (三谷甚二郎・村橋端・馬原鉄男・森田智子ほか二名) 一九五八年四月 九九号
  - 5 部落ボスと闘って三〇年 一九五八年六月 一〇一号
  - 6 “こけ”部落をゆり動かしたもの―若葉子供会の歩みとその成果― 一九五八年七月 一〇二号
  - 7 同和教育の盲点をつく 一九五八年八月 一〇三号
  - 8 ここに俺達の仲間がいた 一九五八年十一月 一〇六号
  - 9 部落はかくしてつくられた―京都市屋形町とその周辺― 一九五九年一月 一〇八号
  - 10 部落三代記―舞鶴市荒田にみる、新しい部落、臨時工、子供会― 一九五九年二月 一〇九号
  - 11 湖東の差別をえぐる―滋賀県彦根市河瀬町広野部落における学校統合問題をめぐる差別― 一九五九年二月 一一八号
  - 12 “黒い羽根”そのかげにひそむもの―筑豊炭田地帯の部落を行く― 一九六〇年三月 一二二号
  - 13 三池争議と部落問題 一九六〇年六月 一二五号
  - 14 進路調査をめぐる問題点 一九六〇年六月 一二五号
  - 31 三木一平小伝―「三木日記」をとおして見た青年像― 一九八四年一〇月 八〇号
  - 32 シンポジウム・部落問題の解決と差別の法規制 (杉之原寿一・野原翹・前野育三・馬原鉄男ほか) 一九八六年二月 八六号
  - 33 国民融合の歴史的位位置 一九八七年一〇月 九二号
  - 34 現代国家支配と部落問題―特別措置法体制と部落解放運動の変容― 一九八八年九月 九五号
  - 35 部落排外主義批判 一九八九年一月 一〇二号

- 15 原爆のなかの部落—ある部落青年の記録—一九六〇年八月 一二七号
- 16 地方自治を守るもの拒むもの—第四回自治研究会をめぐって—一九六〇年十二月 一三二号
- 17 現状認識の体系化と研究の個別化—融和主義の克服をめざして—一九六一年三月 一三四号
- 18 筑豊の部落に救援の手を—一九六一年六月 一三七号
- 19 部落の子どもと進路指導—一九六一年九月 一四〇号
- 20 自治労運動と部落問題—第五回自治研究会から—一九六一年十二月 一四三号
- 21 磯村英一他編『釜ヶ崎スラムの実態』一九六二年二月 一四五号
- 22 融和政策の本質と自治体闘争—一九六一年度の同和事業の問題点—一九六二年三月 一四六号
- 23 △解放の座標① 働く靴工の仲間—一九六二年四月 一四七号
- 24 キリスト教と部落問題—祈りの教団から闘う教団へ—一九六二年五月 一四八号
- 25 転換期にたつ同和行政—第一回自治体職員部落問題研究会から学ぶもの—一九六二年八月 一五二号
- 26 部落解放運動における自治体労働者の役割—第六回自治研究会から—一九六二年十二月 一五六号
- 27 筑豊風雲録—一九六三年一月 一五七号
- 28 完全就職のたたかい—京都市における完全就職闘争の経過と問題点—一九六三年四月 一六〇号
- 29 部落解放の行政とその体制—第七回自治研究会—一九六三年二月 一六九号
- 30 部落史研究の新段階—一九六四年三月 一七二号
- 31 素顔の部落／街道ぞいの部落—松阪市大石小片野中出—一九六四年四月 一七三号
- 32 文献・現状の調査研究—一九六四年五月 一七四号
- 33 私の部落調査論—一九六四年七月 一七六号
- 34 怒りのヤマ・筑豊—第二会社・組夫・部落—一九六五年七月 一九〇号
- 35 未解放部落における労働力の流動形態—一九六五年七月 一九一号
- 36 現状研究の課題—一九六六年三月 二〇〇号
- 37 ルポ・筑豊の部落—大災害一年後の山野炭鉱と部落—一九六六年六月 二〇三号
- 38 部落解放運動と融和政策—一九六八年三月 二二八号

第二章 馬原鉄男の部落問題研究の歩み

- 39 壬申戸籍と部落問題 一九六八年四月 二二九号
- 40 水平運動史上の名著 岡本弥著『特殊部落の解放』一九六八年五月 二三〇号
- 41 水平運動史上の名著 高橋貞樹著『特殊部落一千年史』一九六八年七月 二三二号
- 42 座談会・部落の現状と部落問題研究の課題 (藤谷俊雄・馬原鉄男・中西義雄・鈴木良・石田真二) 一九六八年一〇月 二三五号
- 43 水平運動史上の名著 三好伊平次著『同和問題の歴史的研究』一九六八年一〇月 二三六号
- 44 座談会・「明治百年祭」と部落問題 (藤谷俊雄 鈴木良・安川重行・馬原鉄男) 一九六八年一〇月 二三六号
- 45 「明治百年」と部落問題 9 水平社と反軍閥争 一九六八年一月 二三七号
- 46 水平運動史上の名著 喜田貞吉『特殊部落研究』一九六九年一月 二三九号
- 47 水平運動史上の名著 水平社機関誌『水平』一九六九年七月 二四六号
- 48 「融和事業完成十ヵ年計画」の教訓 一九六九年八月 二四七号
- 49 全国水平社青年同盟機関誌「選民」 一九六九年九月 二四八号
- 50 水平運動史上の名著 天野卓郎編『前田三遊論集』一九六九年一月 二五一号
- 51 部落はどのように変わりつつあるか—安保体制下の部落の現実— 一九七〇年二月 二五五号
- 52 解放闘争の伝統を発掘し闘いの主体を明らかにしよう—水平社創立五〇周年を前にした研究者の課題— 一九七〇年三月 二五六号
- 53 『奈良県同和事業史』の編纂を終えて 一九七〇年七月 二六一号
- 54 分裂の理論と思想を克服するために 一九七二年三月 二七〇号
- 55 完全就職闘争の新段階 一九七二年四月 二七一号
- 56 座談会・解放令百年 (木村京太郎・池田敬正・馬原鉄男・藤谷俊雄) 一九七二年八月 二七六号
- 57 差別糾弾闘争の歴史的意義 一九七二年一〇月 二七九号
- 58 部落解放闘争百年の歴史に学ぼう 一九七二年四月 二八五号
- 59 日本資本主義と部落問題 一九七二年二月 二九五号
- 60 解放理論の創造めざして 一九七三年三月 二九八号

- 61 講座・部落問題の歴史一 | 明治維新と賤民解放令 | 一九七三年五月 三〇一号
- 62 講座・部落問題の歴史二 | 解放令後の部落民の生活 | 一九七三年六月 三〇二号
- 63 講座・部落問題の歴史三 | 都市貧民街の形成 | 一九七三年七月 三〇三号
- 64 講座・部落問題の歴史四 | 天皇制の完成と部落問題 | 一九七三年八月 三〇四号
- 65 講座・部落問題の歴史五 | 産業革命期の部落労働者(上) マッチ工業労働者の場合 | 一九七三年九月 三〇五号
- 66 講座・部落問題の歴史六 | 産業革命期の部落労働者(下) 炭鉱労働者の場合 | 一九七三年一〇月 三〇六号
- 67 講座・部落問題の歴史七 | 資本主義の発展と部落の変化 | 一九七三年一月 三〇七号
- 68 部落問題の歴史 | 一九七三年一月 三〇八号
- 69 部落問題と民主主義 | 一九七三年一月 三〇九号
- 70 講座・部落問題の歴史八 | 帝國主義の形成と部落問題 | 一九七三年二月 三〇九号
- 71 講座・部落問題の歴史九 | 米騒動と同情融和政策 | 一九七四年一月 三一〇号
- 72 講座・部落問題の歴史一〇 | 水平社創立の歴史的条件 | 一九七四年二月 三一一号
- 73 解放の展望を明らかにする研究活動 | 一九七四年三月 三一二号
- 74 講座・部落問題の歴史一一 | 水平運動と融和政策(上) | 一九七四年四月 三一二号
- 75 講座・部落問題の歴史一二 | 水平運動と融和政策(下) | 一九七四年五月 三一二号
- 76 講座・部落問題の歴史一三 | 大恐慌と部落民の窮乏化 | 一九七四年六月 三一五号
- 77 講座・部落問題の歴史一四 | 部落委員会活動 | 一九七四年七月 三一六号
- 78 講座・部落問題の歴史一五 | 準戦時体制と部落問題 | 一九七四年八月 三一七号
- 79 講座・部落問題の歴史最終回 | 水平運動の消滅と同和運動 | 一九七四年九月 三一八号
- 80 部落問題の現状と学習の課題 | 一九七四年二月 三二一号
- 81 部落解放運動の民主的伝統に学ぶ | 一九七五年三月 三二五号
- 82 誇り高き水平運動家の軌跡 | 北原泰作『賤民の後裔 | わが屈辱と抵抗の半生』によせて | 一九七五年六月 三二八号
- 83 就職差別反対闘争の歴史と現状 | 一九七五年八月 三三〇号

- 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84
- 日本の歴史と身分の問題 一九七五年二月 三三四号
- 物語・戦後部落解放運動史一 一 部落解放運動の大衆化 一九七五年二月 三三五号
- 物語・戦後部落解放運動史二 一 基地と部落 一九七六年一月 三三六号
- 物語・戦後部落解放運動史三 一 勤務評定反対のたたかい(上) 和歌山県の場合 一九七六年二月 三三七号
- 国民融合の運動と理論 一九七六年三月 三三八号
- 部落問題の現状と解放への展望 一九七六年四月 三三九号
- 物語・戦後部落解放運動史一四 一 勤務評定反対のたたかい(下) 高知県の場合 一九七六年四月 三三九号
- 物語・戦後部落解放運動史一五 一 三池炭鉱争議と部落問題 一九七六年六月 三四一号
- 物語・戦後部落解放運動史一六 一 六〇年綱領闘争 一九七六年八月 三四三号
- 物語・戦後部落解放運動史一七 一 部落解放要求貫徹大行進 一九七六年九月 三四四号
- 物語・戦後部落解放運動史一八 一 失対打切り反対闘争 一九七六年十月 三四五号
- 物語・戦後部落解放運動史一九 一 就職差別反対のたたかい 一九七六年二月 三四七号
- 物語・戦後部落解放運動史二〇(最終回) 一 部落解放運動をめぐる二つの道 一九七七年三月 三四九号
- 部落問題研究の二つの立場 一九七七年三月 三五一号
- 動向・インドにおけるカースト問題と部落問題研究 一九七七年六月 三五四号
- 動向・部落差別は「階級差別」か 大賀正行『部落解放理論の根本問題』批判 一九七七年一月 三五九号
- 部落解放運動と解放理論 一九七七年二月 三六〇号
- 動向・研究の深化と大衆化 第一五回部落問題研究者全国集会 一九七七年二月 三六一号
- 国民融合論をめぐる理論的争点 一九七八年三月 三六四号
- 同和教育研究会京都府連合会編『基礎から発達と進路の保障をめざして 一 中学校進路実態調査(五ヵ年)』の報告 一九七八年八月 三六九号
- 動向・同和行政の点検・見直しすすむ 第二〇回自治体学校「同和行政」分科会 一九七八年九月 三七〇号
- 動向・国民的融合論の具体的展開を 第一六回部落問題研究者全国集会への期待 一九七八年一〇月 三七一号
- 体系的な部落問題論をめざして 一九七九年三月 三七七号

- 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107
- 動向・年表は研究水準の反映―『戦後部落問題年表』改定増補に当たって― 一九七九年四月 三七八号
- 講座・部落の歴史七 ―明治維新と賤民解放令― 一九七九年四月 三七八号
- 講座・部落の歴史八 ―天皇制の成立と部落問題― 一九七九年五月 三七九号
- 講座・部落の歴史九 ―日本資本主義と部落― 一九七九年六月 三八〇号
- 講座・部落の歴史一〇 ―全国水平社の創立― 一九七九年七月 三八一号
- 講座・部落の歴史一一 ―水平運動の発展― 一九七九年八月 三八二号
- 動向・八〇年代にむけての部落問題研究の方向と課題―第一七回部落問題研究者全国集会に当たって― 一九七九年一〇月 三八四号
- 講座・部落の歴史一二 ―戦時体制と水平運動― 一九七九年一〇月 三八四号
- マスコミの社会的責任を問う 一九八〇年一月 三八七号
- 国民的融合論の豊かな成果 一九八〇年三月 三九〇号
- 座談会・この一〇年間部落解放運動はどう発展してきたか (栃崎博孝・瀬川貞太郎・馬原鉄男・松村晃二) 一九八〇年五月 三九二号
- 国民融合をめざす地域づくり―国民融合全国会議第二回シンポジウムから― 一九八〇年六月 三九三号
- 皮革産業の現状と問題点 一九八〇年八月 三九五号
- 動向・研究 ―第一八回部落問題研究者全国集会に当たって― 一九八〇年九月 三九六号
- 動向・「部落問題の戦後論」展開のために―第一八回研究者集会・真田報告をめぐって― 一九八一年一月 四〇一  
号
- 身分問題をめぐる研究の動向 一九八一年三月 四〇三号
- 部落問題研究と三木さん 一九八一年五月 四〇六号
- 座談会・いま水平運動から何を学ぶか (鈴木良・成沢栄寿・西尾治郎平・馬原鉄男ほか一名) 一九八二年三月 一四  
六号
- 八〇年代と部落解放理論の動向 一九八二年七月 四二二号

- 146145144143142 141140139138137 136135134133132131130129128127 126
- 座談会・学生部落研の現状と活動のあり方をめぐって(高誠郁・三宅匡・遠藤朋巳・馬原鉄男ほか四名) 一九八二年  
一〇月 四二四号
- 部落解放運動と差別糾弾 一九八三年五月 四三二号
- 部落問題の世界的位置 一九八三年七月 四三四号
- 戦後部落解放運動とともに―中西義雄氏の生涯― 一九八四年六月 四四五号
- 部落差別拡大論と排外主義路線批判―解同新綱領の問題点とその批判的検討― 一九八五年一月 四五三号
- 部落はなぜ残ったのか 一九八五年四月 四五六号
- 部落解放運動の新たな展開を求めて 一九八五年五月 四五七号
- 戦後四〇年と部落問題―北原・三木・中西氏の生き方をおして― 一九八五年八月 四六〇号
- 福田雅子著『証言・全国水平社』一九八五年二月 四六五号
- 小見山富江さんを偲ぶ 一九八六年六月 四七一号
- 特集・今日にふさわしい部落解放運動―国民融合をめざす部落解放運動・高知県窪川町興津小室部落四〇年の歴史に  
学ぶ―一九八六年七月 四七二号
- 人権・民族・カースト―その差別と「優遇」政策― 一九八六年八月 四七四号
- 部落解放運動の新たな飛躍を求めて 一九八七年二月 四八〇号
- 同和事業をめぐる腐敗の構造 一九八七年三月 四八一号
- 全国水平社創設者の一人・坂本清一郎さんを偲ぶ 一九八七年三月 四八一号
- 座談会・「差別糾弾」の検討―その逆行的役割を批判する(中野初好・川口是・馬原鉄男・奥山峰夫) 一九八七年七  
月 四八五号
- 民間運動団体 一九八七年九月 四八八号
- 座談会・移行期の運動と行政(広原盛明・三塚武男・浜岡政好・馬原鉄男ほか) 一九八八年二月 四九三号
- いまなぜ転換期なのか 一九八六年六月 四九七号
- 『部落問題研究』隔月刊にあたって 一九八九年八月 五二二号
- 労働者の国際移動と人権 一九八九年二月 五一七号

147 自立・自治・融合 一九九〇年六月 五三三号

D その他

- 1 自由民権運動に於ける玄洋社の歴史的評価 『日本史研究』 一九五六年五月 二八号
- 2 未解放部落とキリシタン部落 『日本史研究』 一九六〇年五月 四八号
- 3 部落解放運動史研究の動向 『日本史研究』 一九六二年一月 五八号
- 4 筑豊炭鉱における労働力の形成と部落 『新しい歴史学のために』 一九六四年九月 九八号
- 5 炭鉱節考 『日本史研究』 一九六四年一月 七五号